

## 戦時下への想像力 屋良健一郎

第十四回「現代短歌新人賞」が山崎聰子『手のひらの花火』に決まった。作者は一九八二年生まれで、早稲田短歌会で活動し、二〇一〇年に「短歌研究新人賞」を受賞した。

- ・塩素剤くちに含んですぐに吐く。遊びなれてもすこし怖いね。
- ・セーターを脱げばいっせいに私たちたましいひとつ浮かべたお

### III

ムなのかもしれない。自分の身を守るために「低い声」の練習をしているのだろう。このような作品が歌集の世界を広げている。ところで、本歌集で最も印象的だったのは「グロリア」という連作だ。風船爆弾という見落とされがちなものをテーマに、戦時下の女学生に成り代わって詠んでいる。

- ・水蒸気いっぱい吸った髪の毛をわたし、隠していつも歩いた
- ・指紋とけてなくなつた指さしだして「お護りください、神さま」と言う
- ・お湯につければちくちく痛む指先に私のなかの刃をおもう
- ・「あそこはもう駄目なんでしょう」名も知らぬ島に咲くという

### 赤い浜百合

制服を濡らしてわたし、みずたまりゆれる校庭の真ん中にいるいずれもノスタルジックな歌である。詠まれている内容はもとより、助詞の欠落や、「皿」ではなく「お皿」とすることで、幼さが生まれ、懐かしさを増す。二首目、体育の着替えの場面と読んでもいいが、体育館に集められてセーター着用を注意されている場面と読みたい。制服の上から着ているセーターだけが、一人一人を別個のものと識別する指標となつていて。それを脱げば、たちまちに識別不能な、どのようにも交換可能な存在となってしまふ。虚無感あふれる現代を舞台とした歌だが、管理教育への反発が高まつた八〇年代を想定して読んでも味わい深い。

- ・髪の毛と目の色「黒」と書かれいるまでを見ている学生課、な
- ・錆びついた共同シャワーをひねりつつ低い声だす練習をする
- ・アメリカへの留学を詠んだ歌。(二首目、男性も使うシャワールー

山崎聰子「グロリア」の試みは、そのような点でも重要だ。

句の社会学(六〇~六六頁)。戦時下の肉体を引き寄せようとする